新しい学びのかたち

「九州の大学で英語力を高めるには崇城大学に行くのが一番の近道」と言われるようになった。原動力となったのが、崇城大学（中山峰男理事長・学長、熊本市西区）の英語学習施設「SILC」（シルク：Sojo International Learning Center）。神田外語大学（宮内孝久学長、千葉市美浜区）と英語教育に関する大学間連携を締結、神田外語大の英語教育を導入、2010年、グローバル人材を育成するために"学内留学"を体感できるSILCを設けた。16年の熊本地震で被災、約2年間、学習環境を学内に分散し、教育を行ってきたが、18年4月、新しいSILCが完成。SILC設立から9年間で、学生の英語力は徐々にアップし、17年の「全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」（神田外語グループ/読売新聞社主催）では文部科学大臣賞を受賞、他にも英語が不可欠なパイロットを養成する工学部宇宙航空システム工学科航空操縦学専攻から次々にパイロットが誕生するなど成果を上げている。SILCの「新しい学びのかたち」をSILC担当者に聞いた。

崇城大学 SILC（シルク）

学生の英語力徐々に上昇

全国学生英語プレコンで文科大臣賞

SILCは、英語を楽しく学べる場で、自律学修をサポートする。全学科の総合教育科目「英語」の授業はここで行う。専任のラーニングアドバイザーとよばれる教員が常駐、英語学習に関する悩みや質問に答えたり、学生の学習計画を一緒に立てるといった自律学修支援も行う。

今回の取材には、ジョン・ローベリー教授と同大事務局でSILC担当の大田黒佳子さんの2人が応じてくれた。（以下の「」の発言は、（大田黒）とある大田黒佳子さんの発言以外は、ジョン・ローベリー教授の発言になる）

まず、「SILC」を設けたねらいから。「中山理事長の『地方の理系大学は、どこも英語教育に苦労している。英語によるコミュニケーションはグローバル教育には欠かせない。英語ができるということはビジネスの可能性も大きく世界へ広がる。多くの学生に、その可能性を広げてやりたい』という熱い思いから実現しました」（大田黒）

神田外語大の英語教育を導入したのは、「学生の授業受講後のきちんとした成果と効果が具体的にイメージできたことと、カリキュラムに具体性があり、学生が伸びるという確信が持てたことなどです」（大田黒）

神田外語大からは、特色ある教育内容（教授法、教員、教材、学習環境）を一体化した『教育ソリューション』という形で導入。外国人教員として派遣されたひとりが、ローベリー教授。5年間の連携協定終結を機に崇城大学教授となった。

新SILC。「以前のSILCは、2016年の熊本地震による被災で、復旧には約2年かかりました。この間、学生には迷惑をかけましたが、昨年4月にリニューアルしました。現在、パワーアップして学生が活用しています」（大田黒）

新SILCは4階建てで、1階にはガラス張りの開放的でおしゃれな『SILC CAFE』を新たに併設。「英語での会話が活発になるような雰囲気に仕上がっています。また、新しいイベントホールは、新入生のウェルカムパーティーやハロウインや七夕などの行事で使われています」（大田黒）

SILCには、自律学修センターSALC（サルク：Self - Access Learning Center）を併設。「一人ひとりのニーズに応えるため、レベルに合った英語を学べる教材を豊富に揃え、外国人講師と気軽に英語でコミュニケーションをとれる"カンバセーションラウンジ"や、マンツーマンでスピーキング力を磨いたり、コンテストや論文へのチャレンジを応援する"スキルズセンター"など、生きた英語を身につけるためのサービスを整えています」

授業の内容。「ここでの英語教育は、一般教養の科目の一つで、1・2年生は全学部必修で、週2回の授業があります。入学後、英語のテストを行い、クラス分けをします。2年になると、たとえばナノサイエンスが専攻なら、それに関する英語を学びます」

「英語の授業が好きではない学生に、スピーキングテストを行い、録音した自分の声を聞かせ、そのあとで単語や文法などのテストをやって英語に親しませ、自分もできるんだと自信をつけさせたりもしています」

「数か月ごとに授業内容を見直します。レベル別にクラスを分けて、英語の4技能、読む・きく・話す・書く力を磨きますので、『テスト対策の使えない英語』でなく『社会で使える生きた英語』を修得することができます」

SALCは、「授業だけでなく、もっと英語を勉強したい」「夏休みに海外に行くので会話を学びたい」など、1人ひとりのニーズに応えるため、豊富な英語の教材を揃えている。学生の疑問等にはラーニングアドバイザーが対応する。

「海外での学会の発表を前に、SALCへ来る学生も結構います。3・4年生になっても、ここへ勉強に来る積極的な学生も結構います」（大田黒）

SILCができて9年、その成果のひとつが、17年の「第6回学生英語プレゼンテーションコンテスト」で最優秀賞の文部科学大臣賞。獲得したのは、古賀碧さん（生物生命学部）、後藤みどりさん（同）、チャン・ティ・ジウ・ヒエンさん（工学部）の3人のグループ。

チーム名は、『ciamo』（シアモ：幸せをもっと）で、「球磨焼酎粕を利用した光合成細菌の培養キットの研究開発と販売」をテーマにプレゼンした。このアイデアは、古賀さんらが、大学公認の部活動「起業部」で発案、現在、大学院で学ぶ古賀さんは（株）ciamoを立ち上げ、社長を務めている。

全国127大学、641人の頂点に立った。

「彼女たち3人は、自分たちの研究していることを英語できちんと伝えることができたのが評価されました。英語の流暢さでは、もっと上手な学生もいたが、外国語学部も英語学科もない、うちのような大学が最優秀賞を取ったのは、まさに快挙です」

「3人は、受賞後、SILCの活用が決め手になったとか、SILCの先生方に全面的にサポートしてもらい万全の準備ができた、とSILCのおかげだと言っていた。SILCの担当として、こんなにうれしいことはありません」

続々と誕生するパイロットの中には、双子も。2019年、安達航大さん（兄）は全日本空輸株式会社（ANA）に、雄大さん（弟）は日本航空株式会社（JAL）に、それぞれパイロット訓練生として就職した。

「パイロットの試験でも英語は重要。2人ともSALCへ来て熱心に勉強していました。熊本地震など様々な困難を乗り越えた末の合格は立派です」（大田黒）

SILCのこれから。

「国際交流センターとコラボして日本から海外に留学する学生を増やすとともに力を入れたい。また、海外の学生を短期留学で受け入れるなどの交流プログラムもやってみたい。キャンパスに日本人と海外の留学生が溢れるような大学になるよう、SILCも力になりたい」

ローベリー教授は流暢な日本語でSILCの夢を明るく語った。



ガラス張りのモダンな新しいSILC



質問に丁寧に答えてくれたジョン・ローベリー教授（右）と大田黒さん（左）

崇城大学

崇城大学は、1967年、実学を掲げ、地域との共生をめざし、熊本工業大学（工学部の単科）として開学。76年、構造工学科（現宇宙航空システム工学科）を増設。97年、空港キャンパスを開設。航空整備士養成やパイロットの養成のため、日本では初めて大学として熊本空港内にキャンパスを設けた。

2000年に芸術学部を設置して総合大学へと発展、大学名を崇城大学に改称した。05年、情報学部、生物生命学部、薬学部を設置。現在、薬学部・生物生命学部・工学部・情報学部・芸術学部の5学部10学科に3676人の学生が学んでいる。

中山峰男学長に聞く



グローバル化で英語力不可欠

学長に就任以来、教育改革を断行、「グローバル化の時代、技術者の多くが海外との仕事に関わる。国際社会で生き抜くには、専門的知識に加え、英語力が必要」とSILCを設置した中山学長に、その狙いや成果、これからを聞いた。

—工学系大学として英語力強化のためにSILCを設置した意図は。

「前身の熊本工業大学時代から実学主義の理念のもと学生が『何ができるようになったか』を重視し、教育教材や研究設備の充実に力を入れてきた。魅力ある大学にしなければ学生が進学してくれないと危機感を持ち、10年程前から教育改革を進めてきた。その中でも、今後社会で必要とされるのは、問題解決能力を身につけグローバルに活躍できる人材で、世界に伍していくためのディベート力や交渉力、受験にはない英語のスピーキング能力が必要と考え、英語教育の改革に取り組みました」

—SILCをつくった思いと、その思いは現在、達成できたか。

「本学は、理系中心の学部構成であり、英語を苦手とする学生が多かった。そこで、神田外語大学に指導を仰ぎ、外国人講師による英語教育ノウハウを導入し、SILCを設立した。自律学修センターSALCは、当初、学生の利用は年間延べ1600人程度だったが、2015年度には2万1000人以上まで増加。2011年度30人程だった留学体験者も、2018年度には270人以上（全学生の7%以上）になった。帰国後オーラルコミュニケーションの重要性を感じ、英語をもっと勉強したいと、SILCに来て勉強する学生も多い。SALCはそのきっかけづくりとなり、好循環が生まれました」

—全国学生英語プレコンでの最優秀賞はSILCの成果だと思うが。

「全国英語プレコンには第1回から参加しており、トップ50には毎年入っていたが、初参加から6年目の快挙です。無限の可能性を持つ若者の力に感動し、更に教育に力を入れたいと思った。受賞チームの『ciamo』は起業を目指す学生部活動の起業部に所属、後輩たちに目標を示し、可能性を広げた。『ciamo』は学生たちの夢の手本となっています」

—新SILCに期待するものは。

「創造的復興を念頭におき、学生たちへより良い学習環境を提供したいとの想いから、設計や内装などにもSILCの外国人講師の意見を全面的に取り入れた。お陰で英語学習のしやすい理想的な施設として生まれ変わった。また新たにカフェを設置するなど、開放的でおしゃれな、英語で楽しくコミュニケーションできる空間も加わり、学生の施設滞在時間が長くなった。今後も更に多くの学生たちが利用して、臆することなく生きた英語を使って世界中で活躍してほしい」

—今後のSILCや英語教育について考えていることは。

「今年度は外国人留学生79人が学内で日本人学生とともに学んでいる。また3年ほど前から日本人学生の海外留学が活発になってきており、学生たちの意識の変化を感じる。海外への留学は昨年を上回り300人を超えるだろう。目標は400人。その頃には、SILCだけでなく学内どこにいてもグローバルな雰囲気を感じられるのではないかと期待している」